

令和 6 年 5 月 2 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H00559

研究課題名(和文)「体制移行」の比較解剖学：グローバリズム下の社会レジーム再編に関する総合的研究

研究課題名(英文) The Comparative Anatomy for Political Transition in Southeast Asia: Exploring Interactions between Local Traditions and Globalism

研究代表者

小林 知 (Kobayashi, Satoru)

京都大学・東南アジア地域研究研究所・教授

研究者番号：20452287

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 32,100,000円

研究成果の概要(和文)：冷戦の終焉に伴って、1990年代の世界では各地で、民主化と市場経済の導入を基軸とした政治体制の移行(体制移行)が生じた。本研究は、その歴史を経験したカンボジア、ミャンマー、東ティモール、ブータンを対象とし、地域研究、文化人類学、農学、経済学、政治学、開発学、国際関係論など複数の分野の研究者を集めて、その内実を問い直す共同研究を実施した。分野横断型の研究集会の討議を通して、各事例の比較検討から個別性と普遍性を明らかにし、体制移行のインパクトは既存の社会の構造(「社会レジーム」)の特徴を反映する形で異なって出現し、また国際社会の動向とも強い相関をもつことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、グローバルな変化の諸力と、ローカルな個別性との交叉するところにあり、その多様な姿を現している地域の成り立ちについて、新しい視角から議論を深めた。具体的には、体制移行という現象を焦点として、カンボジア、ミャンマー、東ティモール、ブータンという対象国の歴史的な成り立ちの特徴を明らかにした。それは、民主化と市場経済化という20世紀後半から21世紀にかけての世界変化の潮流を反映するものであるが、それがそれぞれの地域の社会に如何に異なった形の動態を生み出しているのかを追うことで、各事例の個別性と共に、グローバルな世界をつくる人類社会の多様な発展経路に関して理解を深めることに貢献した。

研究成果の概要(英文)：With the end of the Cold War, we observed many cases of political transition in the world in the 1990s that introduced democratic institutions and market economy. This project selected Cambodia, Myanmar, East Timor, and Bhutan from the countries experienced the political transition in the era and established a multi-disciplinary research team, including area studies, cultural anthropology, agriculture, economics, political science, development studies, international relations, and agriculture, to conduct the joint investigation for the processes and aftermath of political transition in those countries. Through comparative discussions, the project revealed its individuality and universality in each case of political transition. It also explored the way how the impact of regime transition emerged differently in ways that reflect the characteristics of existing social structures ("social regimes").

研究分野：地域研究

キーワード：体制移行 民主化 市場経済化 グローバリズム 地域研究 レジリエンス レジームシフト

## 1. 研究開始当初の背景

地域は、グローバルな変化の諸力と、ローカルな個別性との交叉するところにあり、その多様な姿を現している。本研究は、20世紀後半から21世紀にかけての世界の変化に注目し、グローバリズムと地域の社会変動に関する理解を更新し、より良い将来の社会像を構想するための基礎研究として、アジアの国々における体制移行という現象に着目した。

1980年代末に、世界では冷戦構造が雪解けを迎えた。すると、1990年代を中心に各地で、紛争の終結と政治体制の転換が生じた。冷戦の終結により、大国間の対立を代理する形の紛争は意味を失い、当事者の希望を国際社会が支える形で、平和構築と新しい国家の建設が進められた。ポスト独裁、ポスト内戦といったケースごとの違いはあるとしても、そのようにして建てられた国家は総じて、民主主義を基調とした政治システムと市場経済の導入を特徴とし、国際機関や諸外国からの支援を受けて復興と開発を推し進めた。

ところが、21世紀に入ってしばらくして、そのように進められた体制移行が、当該国において必ずしも当初思い描いたような社会の構築に結びついていないと考えられる状況が明らかになった。例えば、東南アジア大陸部のインドシナ半島の南部に位置するカンボジアでは、1993年に国連の支援を受けて統一選挙が実施され、民主主義の制度を採用した新しい国家が誕生した。そしてその後のカンボジアでは、内戦が再び生じることもなく、経済開発が急ピッチで進んだ。しかし、与党の人民党への権力の集中も着実に進展し、2017年には与党の影響下にある裁判所が、最大規模の野党に解党命令を出し、事実上の独裁的な権威主義体制が確立した。

体制移行という現象については、短期的な時間軸でその成否が議論されることが多かった。しかし、上記のような状況を鑑みると、その現象は中長期的な時間軸で検証してこそ、内実に即した理解に至るものであると考えられた。それはまた、民主化および市場経済化という20世紀から今日にかけて世界で「是」とされるグローバルな原理の意義やインパクトを、具体的事例に即して学術的に検証する絶好のチャンスだとも考えられた。

## 2. 研究の目的

アジアのなかでも、カンボジア、ミャンマー、東ティモール、ブータンは、ともに国連によって後期発展途上国とランクされ（ブータンは2023年12月に卒業）、また1990年代前後に政治体制の移行を果たし、民主主義体制と市場経済原理の導入を進め、国際的な政治経済のアリーナへ接合されたという共通点をもつ。

本研究は、分野横断的な研究チームを組織し、以上の4つの国における体制移行という歴史経験を、当時の政治過程だけでなく、その後その社会や自然環境、住民の価値感においてどのような変容がいかにか生じたのかを明らかにすることを第1の目的とした。研究題目に用いた「解剖学」という視点を念頭に置き、各国の体制移行後の自然環境、政治、経済、社会、文化の変化の様子を「腑分け」して、要素別の特徴を探ると同時に、「社会レジーム」という概念を用い、諸要素の総体からなる地域の全体的特徴を考察することを目指した。

本研究の第2の目的は、4つの国の体制移行の比較検討であった。まず、民主主義と市場経済というグローバルな政治経済システムの特徴を、比較の中で共通項として掘り下げることを想定した。また、比較から浮かび上がる相違点にも着目し、各国の「社会レジーム」の個別の特徴、すなわち地域の個性について理解を深め、人間社会の多様性について新たな形で議論を提起することもねらいとした。

さらに第3の目的として、体制移行を契機として導入された市場経済化のインパクトを、各国の農村で急速に展開する生業活動やコミュニティの変化として把握し、それを先進国のそれと比較することもねらいとした。それは、後期発展途上国で進行する社会再編の特徴を、よりマクロな人類社会史のなかに位置づけて検討することを目指すものであった。

## 3. 研究の方法

本研究の方法は、分野を横断した研究組織による現地調査の実施と、研究集会の開催を通じての討議であった。すなわち、カンボジア、ミャンマー、東ティモール、ブータンを対象に長期の調査の経験をすでにもつ地域研究、文化人類学、農学、経済学、政治学、開発学、国際関係論、医学の各分野の研究者を分担者として研究チームを組織した。そして、それぞれの分担者に、自らのこれまでの研究の対象国および他の国や地域で関心を寄せるトピックについて現地調査を行い、その内容を報告し、討議に参加するよう要請した。

研究集会では、現地調査を通じて分担者が蓄積した最新の情報や知見を他のメンバーと共有するとともに、当該国における体制移行という現象および「社会レジーム」再編の個別的特徴と、民主主義や市場経済に関わる普遍的な特徴について意見交換を行った。研究集会の討議は、カンボジア、ミャンマー、東ティモール、ブータンという国別にまとめて行うだけでなく、特定のト

ピックを通地的に検討し分析を行う分析班を起ち上げて進めた。つまり、すべての分担者と研究協力者に、国家と政治班 / 環境と経済班 / 社会と文化班のどれかに参加するよう依頼し、その班ごとにも討議を重ねた。

#### 4. 研究成果

本研究は2019年4月より開始したが、キックオフの研究集会を経て分担者が現地調査を計画していた矢先の2020年2月に、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、海外渡航を伴う調査活動が不可能になった。その後2021年度にかけての2年余りの期間は、国内ではオンラインツールを利用したハイブリッド形式で研究集会を継続して実施し、同時に海外の共同研究者とオンラインで意見交換するなど臨機応変に研究活動を展開した。対象国への渡航が可能となった2022年度(および研究費の繰り越しによって2023年度も継続)に、適宜、計画にしたがって現地調査を実施した。

活動の2年目は、国家と政治班 / 環境と経済班 / 社会と文化班という分析班別のオンライン研究集会を重ね、討議で焦点とするトピックを析出し、検討した。例えば、政治班は、カンボジア、ミャンマー、東ティモールの3ヶ国における体制移行と暴力の関係を議論し、いずれも国際環境の受け入れとそれへの反動が国内政治のダイナミズムを作っている点を共通項として、そのパターンを比較することを考えた。しかし、ミャンマーについては2021年2月のクーデターで現地調査の道が絶たれ、また分担者の個別の事情もあり、最終的に考察をまとめるには至らなかった。その他にも、体制移行後の国家建設と教育・言語の問題、市場経済下の宗教文化における伝統の再活性化など、分析班として通地的な分析の共通課題を設定したが、新型コロナウイルス感染拡大終息後の短期間に、足並みを揃えてオリジナルな現地調査の成果を揃えることは難しいと判断された。

そこで、活動の3年目(2021年度)の後半からは、通地的な比較検討に関心を払いつつ、それぞれの国別の体制移行後の状況の解明に活動の重点を置くよう方針を定めた。その際は、必要に応じて、研究組織の外からも積極的に研究者を招聘し、当該国の体制移行とその後の「社会レジーム」の再編をどのような歴史経験として捉えるのかを議論した。

##### (1) カンボジアの体制移行と「社会レジーム」

研究代表者が1990年代より調査を行ってきたカンボジアについては、本研究を通じて特に重点的に議論を重ねた。上述したように、カンボジアは、1970年代以降の四半世紀にわたる内戦と国際孤立の後に、国連を中心とした諸外国や国際機関に支援された新しい政治体制が1993年にインストールされた。同時に、1980年代末から始まっていた市場経済の導入が制度化され、地方の農村を含めて近代化・グローバル化が急速に展開した。しかしその後、国内政治は、フン・セン首相が党首を務める人民党の支配のもとで権威主義的体制へ転じた。

政治研究を専門とする山田裕史は、同国で2010年代以降に生じた権威主義体制の強化という現象は、そもそも1993年の体制移行が民主化の始まりであったという前提そのものを疑う必要を示していると総括した。農村経済を研究する矢倉研二郎は、内戦と国際的孤立のなかで手つかずだった国内の資源(土地、水、森林など)を消費する形で始まった同国の経済発展は、農作業の機械化やマイクロファイナンスという新しい金融システムの浸透に支えられる新しい形へと移行がみられることを指摘した。本間香貴と百村帝彦はそれぞれ、森林や土地といった自然資源を利用した住民の生業の変化を解明した。代表者の小林知は、仏教実践の変容を通して、市場経済化と近代化の渦中で変容する住民の価値感について考察した。

カンボジアについては、2021年度の後半より、以上に挙げた本研究のメンバーに加えて、同国で長らく調査を行ってきたその他の研究者を広く招聘し、オンライン会議を連続して行った。その成果は、「政治と市民社会」、「経済と資源」、「社会」、「文化」という4部構成をもち13章からなる書籍(小林知編.2024年5月、『カンボジアは変わったのか:「体制移行」の長期観察1993~2023』めこん)にまとめた。

カンボジアは国土が比較的小さく、民族的同質性が高い。国語としてのカンボジア語で意思疎通し、歴史認識を共有する国民がつくる社会には、外から移植された民主化という新しい試みをはね除け、もともと伝統としてきた権威主義的支配に向かうというレジリアンスを見せた。ただし、その「変化のなさ」は、環境ボーナスの収奪と隣国(タイ、ベトナム)の経済成長、および中国との関係強化といった21世紀の国際的な政治経済に支えられたものである。

##### (2) 東ティモールの体制移行と「社会レジーム」

東ティモールは、長期のインドネシアの実効支配の後、1999年の住民投票で独立が選択され、激しい社会的混乱と国連暫定統治期を経て、2002年に主権を回復した。国連と諸外国政府に支援されて新しい国家が誕生したという点では、カンボジアと共通の歴史をもつ。

国際関係論の立場から研究する井上浩子は、国連の支援の下で構築された自由民主的な制度が2002年から同国でどのように変容していったのかを検討した。福武慎太郎は、体制移行後の市場経済化を同国の高地社会における調査をもとに振り返り、市場に結びついた近代的な経済活動だけでなく、贈与交換を特徴とする伝統経済も同時に再活性化している興味深い状況を考察した。上田達は、首都ディリにおける若者らの抗争の解決や地方の各県を回る十字架の巡行を

テーマに、キリスト教信仰の近年の展開から体制移行後の同国の社会状況を分析した。阿部健一は、平和が実現し経済発展が進む同国で農村から都市へ、国外へ移動する若者が増えている事実を目を向けて、豊かな環境を生かして文化としての農業を振興させる方法を検討した。

東ティモールについては、以上の研究分担者・研究協力者に加えて、同国に関わる国内外の研究者や専門家を交えて、2022年5月に上智大学でシンポジウム「東ティモール民主共和国20周年特別シンポジウム：2002年の『主権回復』を問い直す」を開催した。そして、そのシンポジウムでの報告や議論を元にして、成果出版の計画が進んでいる（福武慎太郎編、2024年刊行予定、『東ティモール 独立後の暮らしと社会の現場から』彩流社）。

東ティモールは、国内に難題を多く抱えながら、欧米の研究機関が作成する民主化達成度のデータベースでは（カンボジアと対照的に）良好なスコアを獲得し、民主主義的な政治制度の定着が期待されている。小面積の島嶼かつ高地が国土の多くを占め、言語グループや歴史経験において極めて多様性に富む住民がつくる社会では、国家機構の建設と国民の形成が同時に進行している。民主主義という新しい政治システムの導入は、「社会レジーム」の構造的特徴も構築過程にあるという状況の下、ひとまず順調に進んでいるように見える。

### （3）国／地域という身体をめぐるエコロジーとレジリアンス

本研究が展開した討議の基底には、地域を身体に喩えて捉える見方がある。体制移行という現象を、歴史経験として議論の俎上に載せて、それを構成した要素を「腑分け」し、影響関係进行分析する。それは、ある地域を構成する要素間のエコロジカルな関係性への想像を誘う。また、それが作りあげる全体的な特徴への関心も生み出し、本研究はその特徴を「社会レジーム」という概念によって議論した。

ミャンマーおよびブータンを含めて、体制移行という歴史的経験の内実と意義を問い直す本研究の討議においては、その国や地域の個別の特徴（個性）をどう考えるのか、という点に議論が集中した。「社会レジーム」のエコロジーを複眼的な立場から考察してゆくと、各地の体制移行後の状況は、もともとの「社会レジーム」の特徴を反映していることが分かる。事実として、体制移行は、レジリアンスが高い社会では容易には進まない。「社会レジーム」が構築過程にある東ティモールの方が、既存のレジームが強固であるカンボジアより、民主主義という新しい政治社会的な理念が息づき、社会への定着を見せていることがその一例である。

一方で、では「社会レジーム」の特徴そのものが変化して、従来のシステムから別のシステムへの移行（レジームシフト）を達成するために必要な条件は何か。この点について、本研究では、対象国の人口構造の変化（世代交代）や広い意味の社会の近代化などに注目して、今後も観察と考察を継続する必要があると結論した。レジリエンスという概念を安易に用いることは慎み、まずは要素レベルの実直な調査と、分野横断的な議論の継続が重要である。

他方、それぞれの地域や国の「社会レジーム」の成り立ちについては、本研究が採用した1990年代以降の約30年間という時間軸よりもはるかに長い期間の歴史に目を向け、情報を整理し、考察する必要がある。

### （4）農村の将来像

本研究は、市場経済化という、体制移行後の変容を各地で牽引したグローバルな力の普遍性を再考する作業も、討議の重要な課題としていた。体制移行後の農村生業構造の変化についてはカンボジア、ミャンマー、東ティモール、ブータンにおける事例報告を重ね、研究期間を通して繰り返し検討を行った。東ティモールでは都市への若者の流出が顕著であり、ブータンでは農村から海外（オーストラリアなど）への労働移民が急速に増加している。カンボジアやミャンマーでは、農村から都市への人口移動が顕著な傾向として見られるとしても、同時に、農業生産も拡大している（その議論の一部は、2023年12月に行われた東南アジア学会の研究大会でパネル報告された）。

先進国で現在目の当たりにするコミュニティの縮小と農業従事者の減少といった農村の状況を、これらの後期発展途上国の農村の将来像として措定してよいものかは、引き続き議論が必要である。ICT技術の進歩によるDXの進展は、今後の農村生業の展開においてユニークな役割を果たす可能性をもつ現代的な条件として、注目される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 MIYAMOTO MARI, MAGNUSSON JAN, KOROM FRANK	4. 巻 80 (1)
2. 論文標題 Animal Slaughter and Religious Nationalism in Bhutan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Asian Ethnology	6. 最初と最後の頁 121 - 145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 小林 知	4. 巻 59
2. 論文標題 生業からみた開発体制下のカンボジアの農村変容	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東南アジア研究	6. 最初と最後の頁 18 ~ 60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20495/tak.59.1_18	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 矢倉 研二郎	4. 巻 59
2. 論文標題 カンボジア・ポーサット州における農業の変化とそのメカニズム	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東南アジア研究	6. 最初と最後の頁 61 ~ 100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20495/tak.59.1_61	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 高堂 泰輔、本間 香貴、小林 知、矢倉 研二郎、ホー サナラ、キム ソベン	4. 巻 59
2. 論文標題 カンボジアにおける灌漑導入が稲作の栽培と生産性に与える影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東南アジア研究	6. 最初と最後の頁 101 ~ 118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20495/tak.59.1_101	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 星川 圭介、小林 知、百村 帝彦	4. 巻 59
2. 論文標題 21世紀の開拓移住によるカンボジア南西部山地の変容	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東南アジア研究	6. 最初と最後の頁 119 ~ 145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20495/tak.59.1_119	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kobayashi Satoru	4. 巻 28
2. 論文標題 Cultural innovation in the face of modernization: a study of emerging community-based care in rural Cambodia	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 South East Asia Research	6. 最初と最後の頁 231 ~ 247
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/0967828X.2020.1816490	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田 正彦	4. 巻 12
2. 論文標題 東南アジアの在来農業と近代技術と「在地の技術」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 熱帯農業研究	6. 最初と最後の頁 37 ~ 40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11248/nettai.12.37	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林知	4. 巻 1
2. 論文標題 <総説>カンボジアという国	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アジア・日本研究Webマガジン アジア・マップ	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井上浩子	4. 巻 186
2. 論文標題 過去との和解、インドネシアとの共生：東ティモールの「争い」の終え方とそのジレンマ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 季刊 民族学	6. 最初と最後の頁 42 - 49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福武慎太郎	4. 巻 -
2. 論文標題 シャナナ・グスマン政権の誕生	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 アジア動向年報2024	6. 最初と最後の頁 408 - 422
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田裕史	4. 巻 -
2. 論文標題 権力は移譲されたのか？ カンボジアにおける「世襲政権」の誕生	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 IDEスクエア 世界を見る眼	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田裕史	4. 巻 8
2. 論文標題 カンボジアの選挙・政党データ (1993-2022年)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 新潟国際情報大学国際学部紀要	6. 最初と最後の頁 87 - 100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松田 正彦、富田 晋介、広田 勲、山本 宗立	4. 巻 15
2. 論文標題 脱農化パラドクス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 熱帯農業研究	6. 最初と最後の頁 73～85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11248/nettai.15.73	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Mari Miyamoto
2. 発表標題 Interrelationship between Monarchy, Religion and Development in Democratic Transition in Bhutan
3. 学会等名 日本南アジア学会第34回全国大会 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松田正彦、富田晋介、広田勲、山本宗立
2. 発表標題 東南アジア農村の生業構造を表す簡易指標 生計多様度指数の標準化と簡便化
3. 学会等名 日本熱帯農業学会・第130回講演会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Fukutake Shintaro
2. 発表標題 Buffalo and Coffee: Resurgence of gift exchange and commodification of livestock in Contemporary Timor-Leste
3. 学会等名 the International Conference TLSA-PT 2020, "Timor-Leste: The Island and the World" (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小島敬裕
2. 発表標題 近現代日本の仏教 戦前・戦後のアジアにおける連続性と断絶
3. 学会等名 日本宗教学会第79回学術大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮本万里
2. 発表標題 市場化される市民社会と「正しい」 仏教：現代ブータンの仏教振興にみる村寺の解体と新たなつながり
3. 学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小林知
2. 発表標題 カンボジア農村の生業変容に関する個別性と普遍性：東南アジア農村の将来
3. 学会等名 東南アジア学会第101回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢倉研二郎
2. 発表標題 ポーサット州農業の変容
3. 学会等名 東南アジア学会第101回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Fukutake, Shintaro
2. 発表標題 Timor-Leste visto de fora: Guerra, Migracoes e Cultura Tetum
3. 学会等名 Sociedade de Geografia de Lisboa (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Fukutake, Shintaro
2. 発表標題 A View of Timor-Leste from the frontier: Wars, Migrations, and Culture in the Southern Tetun Society
3. 学会等名 Seminarios GS Identidades, Culturas, Vulnerabilidades Instituto de Ciencias Sociais (Institute of Social Sciences), Universidade de Lisboa (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Fukutake, Shintaro
2. 発表標題 Missions, Language, and Local beliefs in Central Timor
3. 学会等名 The 11th International Convention of Asian Scholars (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 百村帝彦
2. 発表標題 ポーサット州山地フロンティアにおける農地開拓の過程
3. 学会等名 東南アジア学会第101回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 百村 帝彦
2. 発表標題 開拓フロンティアにおける土地利用の変遷: カンボジア・ヴィアルベーンの事例
3. 学会等名 第29回日本熱帯生態学会年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ueda, Toru
2. 発表標題 Bearing Faith and Wearing Belak: A Study on the Belief in Contemporary Timor-Leste
3. 学会等名 The 11th International Convention of Asian Scholars (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小島 敬裕
2. 発表標題 戦前・戦後における日本とミャンマーの仏教交流史
3. 学会等名 龍谷大学世界仏教文化研究センター研究セミナー (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sakamoto, Ryota
2. 発表標題 Health and aging in Bhutan: How can we build up a sustainable health care system for senior citizens?
3. 学会等名 The 11th INDAS-South Asia International Conference, "Life and Death in Contemporary South Asia"
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮本万里
2. 発表標題 宗教ナショナリズムと層場の政治－ブータンの仏教世界とその周縁
3. 学会等名 2019年度南アジアセミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安藤和雄
2. 発表標題 実践型地域研究によるブータンの過疎・農業離れ問題へのアプローチ
3. 学会等名 日本国際地域開発学会2019年度春季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿部健一
2. 発表標題 演劇ワークショップでアジアの農村をつなぐ：高校生を対象とした交流事業
3. 学会等名 国際ボランティア学会第21回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 本間香貴
2. 発表標題 ポーサット州における稲作栽培体系の特徴と変容
3. 学会等名 東南アジア学会第101回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井上浩子
2. 発表標題 民主化と非自由化の同時進行：東ティモールにおける「リベラル国家構築」の20年
3. 学会等名 国際政治学会国際交流分科会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山田裕史
2. 発表標題 国連暫定統治後のカンボジアにおける非民主化と権威主義の強化
3. 学会等名 日本比較政治学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松田正彦
2. 発表標題 東南アジアの脱農化と農業化
3. 学会等名 第105回 東南アジア学会研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ou Nary, Hyakumura Kimihiiko, Fujiwara Tkahiro
2. 発表標題 The Benefits and Challenges of Agricultural Cooperatives in Cambodia
3. 学会等名 第33回 日本熱帯生態学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮本万里
2. 発表標題 ブータン仏教と王権の位相 国民文化形成における排除と包摂の契機をめぐって
3. 学会等名 「宗教と社会」学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小林知（編）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 めこん	5. 総ページ数 591
3. 書名 カンボジアは変わったのか 「体制移行」の長期観察1993-2023	

1. 著者名 福武慎太郎（編）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 -
3. 書名 東ティモール 独立後の暮らしと社会の現場から	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	坂本 龍太  (Sakamoto Ryota)  (10510597)	京都大学・東南アジア地域研究研究所・准教授   (14301)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小島 敬裕  (Kojima Takahiro)  (10586382)	津田塾大学・学芸学部・教授    (32642)	
研究分担者	安藤 和雄  (Ando Kazuo)  (20283658)	京都大学・東南アジア地域研究研究所・連携教授    (14301)	
研究分担者	矢倉 研二郎  (Yagura Kenjiro)  (20454647)	阪南大学・経済学部・教授    (34425)	
研究分担者	井上 浩子  (Inoue Hiroko)  (20758479)	大東文化大学・法学部・准教授    (32636)	
研究分担者	本間 香貴  (Homma Koki)  (60397560)	東北大学・農学研究科・教授    (11301)	
研究分担者	松田 正彦  (Matsuda Masahiko)  (60434693)	立命館大学・国際関係学部・教授    (34315)	
研究分担者	山田 裕史  (Yamada Hiroshi)  (60535798)	新潟国際情報大学・国際学部・准教授    (33107)	
研究分担者	上田 達  (Ueda Toru)  (60557338)	摂南大学・外国語学部・教授    (34428)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宮本 万里  (Miyamoto Mari)  (60570984)	慶應義塾大学・商学部（日吉）・准教授    (32612)	
研究分担者	百村 帝彦  (Hyakumura Kimihiko)  (80360783)	九州大学・熱帯農学研究センター・教授    (17102)	
研究分担者	福武 慎太郎  (Fukutake Shintaro)  (80439330)	上智大学・総合グローバル学部・教授    (32621)	
研究分担者	中西 嘉宏  (Nakanishi Yoshihiro)  (80452366)	京都大学・東南アジア地域研究研究所・准教授    (14301)	
研究分担者	上田 晶子  (Ueda Akiko)  (90467522)	名古屋大学・国際開発研究科・准教授    (13901)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	阿部 健一  (Abe Kenichi)  (80222644)	総合地球環境学研究所・経営推進部・教授    (64303)	
研究協力者	赤松 芳郎  (Akamatsu Yoshirou)  (80826199)	京都大学・東南アジア地域研究研究所・特定助教    (14301)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	長田 紀之 (Osada Noriyuki) (70717925)	日本貿易振興機構アジア経済研究所・地域研究センター・研究員 (82512)	
研究協力者	笹川 秀夫 (Sasagawa Hideo) (10435175)	立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授 (37503)	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 Cambodian Society and Buddhism since 1993	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 Emerging Political Divide amidst Democratic Consolidation in Bhutan	開催年 2024年～2024年

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
カンボジア	王立プノンベン大学	王立農業大学	王立芸術大学	
ブータン	Bhutan Ecological Society			
ミャンマー	ヤンゴン大学	モーピン大学	イエジン農業大学	
東ティモール	東ティモール国立大学			
ポルトガル	リスボン大学			